

本日の学び テーマ:「十字架のキリストと共に」 テキスト:ガラテヤ2章15-3章6節

【理解の手がかりとして】

小見出しに「すべての人は信仰によって義とされる」とあるが、これがパウロが確信している「キリストの福音」。これ以上でも、これ以下でもない、そのものずばりの福音の内容。しかし人間は、その福音に何かしらの条件を付けたがる。「信じるだけではだめだ。足りない。加えてこれが必要だ!」と。実際にガラテヤにおいても「ほかの福音」(1:6) というものを持ち込み、信徒たちを惑わしていた人々がいた。そういう事態、「キリストの福音」から離れる信徒たちを心配して、パウロは「福音の真理」について解き明かした。

15 節でパウロは「わたしたちは生まれながらのユダヤ人であって、異邦人のような罪人ではありません」(2:15) と言っている。これは大変意外な内容。なぜパウロはこのようなことを語ったのか。・・・これにはいろいろな考え方がある。一つに「これは当時の一般的なユダヤ教の立場が示されているのだ」という考え方。ここで言うところの「わたしたち」とは、文章の流れからすれば「ペトロとパウロ」を指すこととなるが、もっと広く「一般的なユダヤ人」を指しており、その一般的な異邦人観「異邦人は罪人である」ということを取り上げたにすぎない、という考え方である。ただ、それは少し表面的な受け取り方のように思う。ここには大いなる皮肉と言うか、果たしてユダヤ人(パウロを含む)は「罪人ではない」とは言い切れるのか、という反語のような問いかけが含まれているのではないか。16 節に出てくる「律法の実行」という言葉とも関係するが、果たして「ユダヤ人」は、それらを完全に遵守してきたのか、という問いも含むと思う。

そのような問いを、生粋のバリバリのユダヤ人であったパウロが言うところに説得力がある。「自分はユダヤ人として自負心を抱いて生きてきた。自分たちこそ『神の民』と信じて、そのプライドに生きてきた。そして異邦人を差別してきた。『お前達は罪人だ』と上から見てきた。しかし、本当にそうなのだろうか。他でもないユダヤ人である私はどうなのか」と自ら問うたわけである。そして彼は気づかされた。律法の一点一画を守り抜ける者は誰もいない。「律法の実行」によって「義(正しい者)」と認められる者は誰一人いないのだ・・・ということ。

16 節の「キリストへの信仰」と訳されているギリシア語は二つの解釈が可能。一つは「イエス・キリストを信じること」。もう一つは「キリスト・イエスの信仰(信実)」である。日本語聖書の多くは前者を採用しているが、直近の聖書協会共同訳は後者を採っている。これに関して、『「イエス・キリストからいただく信仰」と理解したいと思います。キリストから恵みとしていただく信仰によって、私たちは神の御前に罪人ではないと認めていただくことができるのです。・・・イエス・キリストからいただく信仰によってのみ、私たちは神の御前で義と認められるのです」(村瀬俊夫著『大事なのは、愛によって働く信仰～ガラテヤ人への手紙・ヤコブの手紙講解～』)という解釈は大いに合点がいく。「いただく」という理解が信仰の本質だと思うからである。

というのは、「信じること」が私たちの努力の範疇で捉えられるとき、それはまたかつての「律法主義」と同じことではないか、と思うからである。そこではやはり「自力」による義が求められ、「神の恵み」(2:21) を無にすることになるからである。信仰はいただくもの、まさに聖霊の結ばせる実である。「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです」(一コリント 12:3) とあるとおり。

キリストへの信仰をいただくとき、私たち一人ひとりの人生は変えられる。罪人が義とされる、というのは、それまでの古い自分がそのままの姿であり続ける、ということではない。新しい自分に創造されるのである。19 節後半に「わたしは、キリストと共に十字架につけられています」とある。現在完了形である。信仰を得たあの瞬間から、今の今までずっと「十字架につけられつづけている」——これは「古い自分から新しい自分へとされ続けている」ということ、不可逆的な自分へと造り変えられ、もはやキリストのものとなっている、ということ。これが、信仰がもたらす神の業である。

その新生理解を持つパウロだからこそ、逆戻りしようとするガラテヤの信徒の状況を看過できなかった。パウロは言う。「ああ、物分かりの悪いガラテヤの人たち、だれがあなたがたを惑わしたのか」

(3:1) と。とても激しい語りかけである。またパウロは「あなたがたに“霊”を授け、また、あなたがたの間で奇跡を行われる方は、あなたがたが律法を行ったから、そうなさるのでしょうか。それとも、あなたがたが福音を聞いて信じたからですか」(3:5) と問いかける。

「あなたがたに“霊”を授け」の「霊」に“ ” (ダブルクォーテーションマーク) が付いているときは、新共同訳聖書では「聖霊・神の霊・主の霊」を意味する。口語訳聖書では「御霊を賜い」と訳されていた。

「賜い」・・・そう「賜る」のである。それは天から一方的に頂く恵み。「御霊を賜る(聖霊・神の霊・主の霊を授けられる)」というのは、「神の子」とされることと考えて良いだろう。また「救われる」とも言える。つまり、神の救いはただただ上より賜る恵みなのである。この信仰の恵みの事実、彼らを立ち戻らせようとするパウロである。

末節の6 節では信仰の父アブラハムの名が挙げられる。アブラハムは神の言葉をただ受け入れ、その約束がすでに起こった現実であるかのように信じて生きた人である。だから「あなたがたも信仰によって生きるならば、アブラハムと同じように祝福を受ける者とされる！」とパウロは言うのである。

【聖書教育より】

「パウロはイエスさまとの出会いを大切にしていました。パウロは『キリストがわたしの内に生きて』いますとさえ言っているのです。すごい言葉です。…私たちも『こんなとき、イエスさまだったらどうするだろう?』と考えたことはありませんか。そんなとき、私たちの内にもイエスさまが生きてくださっているのではないのでしょうか。」(子どもクラス)